

令和4年2月22日

令和3年度日本芸術院会員候補者の決定について

日本芸術院（院長 高階秀爾）は、芸術上の功績顕著な芸術家9名を、日本芸術院会員候補者として決定しましたので、お知らせします。

1. 日本芸術院会員候補者の決定

日本芸術院は、令和3年9月上旬、11月下旬に開催した会員候補者推薦委員会、及び12月中旬に開催した各部の会員候補者選考委員会にて選考の上、会員による投票を経て会員候補者を内定し、会員総会の承認を経て令和4年2月8日に9名を日本芸術院会員候補者として決定し、同日付けで日本芸術院長から文部科学大臣に上申しました。

令和4年3月1日付けをもって文部科学大臣から発令の予定です。

2. 文部科学大臣に上申した会員候補者（略歴・賞歴等は別添資料を御覧ください。）

【第一部（美術）】

第一分科（絵画）	せんじゅ 千住	ひろし 博	
第二分科（彫刻）	みやせ 宮瀬	とみゆき 富之	（本名：みやせ ともお 富夫）
第四分科（書）	ほし 星	こうどう 弘道	
第五分科（建築・デザイン）	いとう 伊東	とよお 豊雄	

【第二部（文芸）】

第七分科（小説・戯曲）	いつき 五木	ひろゆき 寛之	
第十分科（マンガ）	ちば ちば	てつや てつや	（本名：ちば 徹弥）
第十分科（マンガ）	つげ つげ	よしはる 義春	（本名：つげ 義春）

【第三部（音楽・演劇・舞踊）】

第十一分科（能楽）	のむら 野村	まんさく 万作	（本名：のむら じろう 二郎）
第十五分科（洋楽）	おざわ 小澤	せいじ 征爾	

<担当>

日本芸術院

事務 長：小松 清

電話：03-3821-7191

文化庁参事官（芸術文化担当）

参事官補佐：伊野 哲也（内線 2823）

電話：03-5253-4111（代表）

絵画

せん じゅ ひろし
千 住 博



推薦理由

氏は、東京藝術大学において学び、模索と試行錯誤をくりかえしながら、ニューヨークに日本画制作の拠点を移し、幾多の研鑽^{けんさん}を積み、日本画の新しい可能性と新しい表現を確立した。第46回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展への出品と受賞、メトロポリタン美術館、故宫博物院、シカゴ美術館の個展等、日本画についての普及や啓発、その国際展開にも尽力している。令和3年に恩賜賞・日本芸術院賞を受賞した。高野山金剛峯寺、平安時代に弘法大師・空海が開創した聖地に氏が奉納するために描いた襖^{ふすま}絵の「瀧図」、
「断崖図」は、氏の集大成と言える作品である。ほのかな明るさと陰翳^{いんえい}を伴う歴史ある金剛峯寺の空間と共にある氏の作品は、日本画の新しい可能性と新しい表現を具現化し、日本の美術史においても新たな領域へと向う礎のひとつとなっている。

【略歴】

昭和33年1月7日 東京都生まれ 64歳

昭和57年 東京藝術大学美術学部絵画科日本画専攻卒業（同59年同大学院美術研究科絵画（日本画）専攻修了、修了制作藝大買上、同62年同大学院美術研究科博士後期課程美術専攻満期退学）

平成14年 伊東・大徳寺聚光院別院襖絵を奉納

平成19年 フィラデルフィア「松風荘」障屏画を完成

平成21年 ベネッセアートサイト直島・家プロジェクト「石橋」を完成

平成25年 京都・大徳寺聚光院本院障屏画を奉納

令和2年 高野山金剛峯寺障屏画を奉納

令和3年 国宝薬師寺東塔平成大修理奉賛 平成の寶玉に選出され、同奉納

令和3年 出雲大社へ「滝」3点を奉納

【賞歴】

平成7年 第46回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展名誉賞

平成14年 第13回MOA岡田茂吉賞絵画部門大賞

平成28年 外務大臣表彰

平成29年 第4回イサム・ノグチ賞

平成30年 日米特別功労賞

令和3年 第77回恩賜賞・日本芸術院賞（「瀧図」に対して）

彫刻

みや せ とみ ゆき
宮 瀬 富 之
(本名 宮 瀬 富 夫)



推薦理由

氏は、現在、「日展」、「日本彫刻会」を中心として日本の彫刻界の発展に大きく寄与し、現役彫刻家として注目すべき活躍をしている。氏の長年に亘る出品作品の中に独自の魅力ある快作が多数あるが、特に近年は円熟した優作を発表してきている。確かなデッサンの上に、平素のたゆまぬ自然観察から得た心象的風景を自身の作品の内に融合させ独特な立体表現を志している。そこには氏の美意識の高さと理想とする形態を実現する意志が明確に感じられる。その学びは単なるリアルな現象的表現にとどまらず技術力の高さを感じる。人格的には実に誠実な努力家であり、長年に亘り教職に携わり指導者としての芸術観や美術観の深い造詣を内に秘めている。

【略歴】

昭和16年10月4日 京都府生まれ 80歳

昭和42年 松田尚之に師事

昭和42年 第10回日展初入選（「ポーズする女」に対して）

昭和43年 金沢美術工芸大学美術学科彫刻専攻卒業

昭和52年 大阪成蹊女子短期大学助教授（同59年教授、平成11年名誉教授、同15年学長、同19年まで）

平成11年 金沢美術工芸大学彫刻専攻主任教授、修士・博士課程教授（同15年まで）

平成18年 (社)日本彫刻会監事(同21年まで、同22年理事、同30年まで、令和3年再任、現在まで、平成28年委員長、同30年まで ※現公益社団法人)

平成19年 大阪成蹊大学学長（同21年まで）

【賞歴】

昭和46年 第1回日彫展日彫賞（「糸とり」に対して）（後1回）

昭和48年 第5回日展特選（「風のよそおい」に対して）（後1回）

昭和60年 第15回日彫展西望賞（「早く来ないかなあ」に対して）

平成17年 第37回日展内閣総理大臣賞（「はんなりと石庭」に対して）

平成18年 第19回京都美術文化賞

平成21年 第65回日本芸術院賞（「源氏物語絵巻に想う」に対して）

書

ほし 星 こう 弘 どう 道



推薦理由

書における筆線は、自身の心情を無限に表現できるものである。氏はその可能性を引き出すことだけに日々修練を重ね、強靱^{きょうじん}な線、豊潤な線、瀟洒^{しょうしや}な線等、変幻自在な筆線を自己のものとし作中に表現する。書聖^{おうぎし}王羲之の書法から中国明清時代の書法までを幅広く渉猟、それらを自家薬籠中のものとして独自の世界を展開、その作品の技法と品格の高さは他の追随を許さず、平成24年には日本芸術院賞を受賞した。他方、(公社)全日本書道連盟の理事長を三期務め、書教育の充実や国内外との書交流に尽力、また大学で教鞭^{きょうべん}を執り後進の育成も積極的に努めてきた。作家として大変優れるのみならず、書の発展のために^{しかい}斯界に多大な貢献をした氏の業績を高く評価する。

【略歴】

昭和19年9月10日 栃木県生まれ 77歳
昭和40年 戒行寺住職・院首（現在まで）
昭和42年 立正大学仏教学部卒業
昭和44年 浅香鉄心に師事
昭和50年 第7回日展初入選（「高青邱詩」に対して）
平成 7年 大東文化大学文学部教育学科非常勤講師（同15年書道学科非常勤講師、同22年特任教授、同27年まで）
平成10年 日本書作院理事長（現在まで）
平成13年 (社)全日本書道連盟理事（同23年副理事長、同27年理事長、令和3年顧問（永年） ※現公益社団法人）
平成26年 (公財)全国書美術振興会常務理事（現在まで）

【賞歴】

昭和57年 第10回日本書作院展上野の森美術館賞・日本書作院展全日本学士会賞（「高青邱詩」に対して）
平成 2年 第22回日展特選（「蘇東坡詩」に対して）（後1回）
平成19年 第39回日展日展会員賞（「李濂詩」に対して）
平成22年 第42回日展文部科学大臣賞（「小學之一文」に対して）
平成24年 第68回日本芸術院賞（「李頎詩^{り き し} 贈^{ちようきよくにおくる} 張 旭」に対して）

い とう とよ お
伊 東 豊 雄



(撮影 藤塚 光政)

推薦理由

氏は、装飾性を排したミニマルで無機的な建築から出発した。1980年代から氏の関心は情報メディアや消費文化が発展した都市環境における新たな建築の可能性に向けられ、それを身体感覚的に表現したともいえる作品を試みるようになった。パンチング・メタルで覆われた「風の塔」(昭和61年)は、光を透過させる被膜という一種エフェメラルな性格をもった建築である。「せんだいメディアテーク」(平成13年)の外壁はガラスで、階を斜めに貫く13本の鋼鉄のシャフトで全体が支えられており、外部から透視できるその建築構造は、情報化時代における都市のシンボルをなしているといつてよい。このように氏は常に先鋭な問題意識をもって新たな建築のモデルを提示し、国際的にもきわめて高く評価されてきた。アトリエからは優れた後進たちが育っている点も注目されている。

【略歴】

昭和16年6月1日 韓国ソウル生まれ 80歳

昭和40年 東京大学工学部建築学科卒業

【賞歴】

昭和61年 日本建築学会賞作品賞（「シルバーハット」に対して）

平成10年 第48回芸術選奨文部大臣賞（「『大館樹海ドーム』の設計」に対して）

平成11年 第55回日本芸術院賞（「『大館樹海ドーム』の設計」に対して）

平成14年 第8回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞（生涯業績部門）

平成15年 日本建築学会賞作品賞（「せんだいメディアテーク」に対して）

平成18年 王立英国建築家協会ロイヤルゴールドメダル

平成22年 朝日賞

平成22年 高松宮殿下記念世界文化賞

平成24年 第13回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞（日本館コミッショナー）

平成25年 プリツカー建築賞

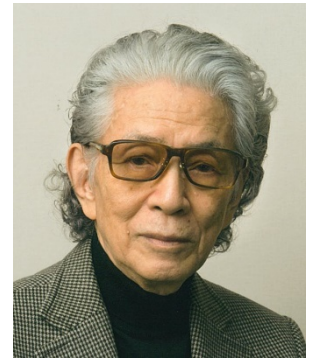
平成29年 国際建築家連合ゴールドメダル

平成30年 文化功労者

令和 3年 旭日重光章

小説・戯曲

いつ き ひろ ゆき
五 木 寛 之



推薦理由

氏は、福岡県に生まれ、朝鮮半島で幼少期を過ごし、終戦後、日本に引き揚げた。その経験が、氏の表現者としての原点となり、自らをデラシネ（漂流者）と規定する中から、「さらばモスクワ愚連隊」、「蒼ざめた馬を見よ^{あお}」、そして代表作「青春の門」が生まれ、日本人、特に若い人々の共感を獲得して、現代日本を代表するベストセラー作家となった。また、「カモメのジョナサン」の翻訳は、そのヒューマニスティックな独特の世界で一世を風靡し、「風の王国」、「大河の一滴」、「百寺巡礼」等、歴史や仏教を題材にした紀行文、随筆においても多くの日本人の心をつかんだ。そして、氏は今なお、文学を通じて、昏迷する世界で、人はどう生きるべきか、語りかける作業を続けている。

【略歴】

昭和 7 年 9 月 3 0 日 福岡県生まれ 8 9 歳
昭和 4 5 年 九州芸術祭文学賞選考委員（現在まで）
昭和 4 8 年 泉鏡花文学賞選考委員（現在まで）
昭和 5 3 年 直木三十五賞選考委員（平成 22 年まで）
昭和 5 5 年 江戸川乱歩賞選考委員（同 56 年、平成 3 年から同 6 年まで）
昭和 6 3 年 小説すばる新人賞選考委員（現在まで）
平成 3 年 吉川英治文学賞選考委員（現在まで）
平成 6 年 蓮如賞選考委員（同 11 年まで）
平成 9 年 日本ミステリー文学大賞選考委員（同 12 年まで）

【賞歴】

昭和 4 1 年 第 6 回小説現代新人賞（「さらばモスクワ愚連隊」に対して）
昭和 4 2 年 第 56 回直木賞（「蒼ざめた馬を見よ」に対して）
昭和 5 1 年 第 10 回吉川英治文学賞（「青春の門・筑豊篇（上・下）ほか」に対して）
平成 1 4 年 第 50 回菊池寛賞
平成 2 2 年 第 61 回日本放送協会放送文化賞
平成 2 2 年 第 64 回毎日出版文化賞特別賞（「親鸞（上・下）」に対して）
平成 2 7 年 第 57 回日本レコード大賞・功労賞

マンガ

ちばてつや

(本名 千葉 徹弥)



推薦理由

戦後日本マンガの金字塔の一つとも言える「あしたのジョー」で、原作をさらに深く解釈し、独自のエピソードや表現を加え、主人公が「真っ白になる」までを描き切り、スポーツマンガの大ヒット作という域を超え、同時代の若者文化を代表する作品に高めた。日本マンガの一大潮流であるスポーツマンガ興隆の最大の貢献者であるのみならず、初期の少女マンガにおいても悲しい運命に翻弄されながらも、主体的にそれに向き合う主人公像を打ち出して後続の作家たちに大きな影響を与えた。少年マンガに進出した後も、登場人物たちの細やかな心の動きや生活のディテールを繊細かつ丹念に描き込む作風は、日本のマンガ表現の深化に絶大な影響を与えた。日本漫画家協会会長、そしてマンガ家養成課程を持つ文星芸術大学学長として、マンガ文化の発展、マンガ家の育成に尽力し続けている。

【略歴】

昭和14年1月11日 東京都生まれ 83歳

昭和60年 (社)日本漫画家協会理事(平成6年まで、同8年理事、同10年常務理事、同24年理事長、同30年会長、現在まで ※現公益社団法人)

平成17年 文星芸術大学教授(同31年学長、現在まで)

【賞歴】

昭和37年 第3回講談社児童まんが賞(「1・2・3と4・5・ロク」・「魚屋チャンピオン」に対して)

昭和51年 第7回講談社出版文化賞児童まんが部門(「おれは鉄兵」に対して)

昭和52年 第6回日本漫画家協会賞特別賞(「のたり松太郎」に対して)

昭和54年 第23回小学館漫画賞青年一般部門(「のたり松太郎」に対して)

平成13年 第30回日本漫画家協会賞文部大臣賞(「全作品」に対して)

平成14年 紫綬褒章

平成21年 第33回講談社漫画賞講談社創業100周年記念特別賞

平成24年 旭日小綬章

平成26年 文化功労者

平成29年 練馬区名誉区民

マンガ

つ げ よし はる
義 春
(本名 つ げ よしはる
柘植 義春)



推薦理由

1960年代後半に「ガロ」誌上に発表した短編作品群以降、紀行文学的、あるいは私小説的な、小さなエピソードの中に人間存在の不条理や世界からの疎外を垣間見せる「文学的な」表現によって、自己表現としてマンガを捉える青年たちに絶大な影響を与えただけでなく、マンガの世界を越えて、美術と文学の世界からも高い評価を集め、その作品を読み解く試みを誘発してマンガ評論の発展にも影響を及ぼした。1970年代から80年代にかけても、ユーモアを含んだ独自の作品を発表し、その生き方がトータルに注目される唯一無二の存在となっている。今日もなお文庫や全集の形で作品が読まれ続け、海外からも高い評価を得ている、まさに「芸術」としてのマンガ表現において日本を代表する作家である。

【略歴】

昭和12年10月30日 東京都生まれ 84歳

平成26年 「つげ義春の旅へ。つげ義春が愛した岩瀬湯本・二岐温泉フォーラム2014」
・展示会（同27年フォーラム2015・展示会）

令和 元年 The Citi exhibition Manga（大英博物館）「ねじ式」出品

令和 元年 つげプロジェクトVOL.1 ねじ式展

【賞歴】

平成29年 第46回日本漫画家協会賞大賞（コミック部門「つげ義春 夢と旅の世界」に対して）

令和 2年 第47回アンダレーン国際漫画祭特別栄誉賞

能楽

の むら まん さく
野 村 万 作
(本名 野村 二郎)



推薦理由

氏は、人間国宝六世野村万蔵の次男として昭和6年に生まれた。3歳で初舞台を踏み、昭和25年に二世万作を襲名し、以後芸術祭大賞・日本芸術院賞・紫綬褒章・朝日賞など内外数々の賞を受けている。平成19年に重要無形文化財（各個認定）、同24年旭日小綬章受勲、同27年には文化功労者に認定されている。昭和31年「釣狐」を、同35年「花子」を、同61年には「狸腹鼓」を それぞれひら 其々披き、以後今日に至るまで再演を重ねている。子息の萬斎や孫の裕基を始めとする一門の会「万作の会」の活動や「万作を観る会」「狂言ござる の 乃座」などの舞台を通じて伝統芸能の普及と振興というにとどまらない、多岐にわたる多彩な活躍には目を見張るものがあり、後進の育成や指導にも顕著な成果をあげている。現在の狂言界を代表する一人である。

【略歴】

昭和 6年6月22日 東京都生まれ 90歳

昭和28年 早稲田大学文学部卒業

【賞歴】

昭和40年 第19回文化庁芸術祭奨励賞（「冠者会における『釣狐』の演技」に対して）
（後1回）

昭和48年 第27回文化庁芸術祭優秀賞（大槻清韻会定期会における能『定家』の間（アイ）
の演技」に対して）（後2回）

昭和53年 第32回文化庁芸術祭大賞（「『狂言・釣狐を見る会』の演技」に対して）

昭和55年 第14回紀伊国屋演劇賞（劇「『子午線の祀り』の演技」に対して）

昭和61年 観世寿夫記念法政大学能楽賞（「『連歌盗人』『子午線の祀り』等の演技」に
対して）

平成 2年 第46回日本芸術院賞（「能狂言の優れた演技」に対して）

平成 2年 第11回松尾芸能賞（「海外公演につくした努力及び芸の円熟と充実した活動」に
対して）

平成 7年 紫綬褒章

平成10年 坪内逍遙大賞（「日本の演劇文化の振興に対する功績」に対して）

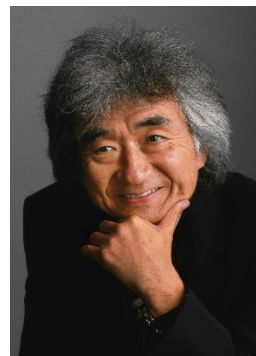
平成19年 朝日賞（「長年にわたる狂言の優れた上演と幅広い舞台芸術への貢献」に対して）

平成19年 重要無形文化財「狂言」（各個認定）保持者

平成27年 文化功労者

洋楽

お ざわ せい じ
小 澤 征 爾



(撮影 Shintaro Shiratori)

推薦理由

氏は、多年にわたり、国際的指揮者として世界の聴衆を魅了するとともに、情熱あふれる芸術活動で、音楽界の発展に大きく貢献してきた。天性の鋭い音楽的感觉と鍛え上げられた技術による演奏で、若くして世界的な評価を得て、ニューヨーク・フィルハーモニックの副指揮者やトロント交響楽団、サンフランシスコ交響楽団、ボストン交響楽団の音楽監督などを歴任。さらにウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団やミラノ・スカラ座、パリ・オペラ座などのオーケストラや歌劇場でも指揮者を務めるなど国際的に活躍し、平成14年にはウィーン国立歌劇場音楽監督に就任（同22年まで）。また、我が国の主要オーケストラでも数多く指揮にあたり、さらに音楽祭や自ら主宰するプロジェクトなどを通して、若手音楽家の育成にも大いに尽力しており、その功績は極めて顕著である。

【略歴】

昭和10年9月1日 中国瀋陽市（旧奉天）生まれ 86歳
昭和47年 新日本フィルハーモニー交響楽団を結成、首席指揮者（平成3年名誉芸術監督、同11年桂冠名誉指揮者、現在まで）
昭和48年 ボストン交響楽団常任指揮者・音楽監督（平成14年まで）
平成4年 サイトウ・キネン・フェスティバル（現セイジ・オザワ松本フェスティバル）総監督（現在まで）
平成12年 小澤征爾音楽塾音楽監督（現在まで）
平成14年 ウィーン国立歌劇場音楽監督（同22年まで）
平成25年 水戸室内管弦楽団総監督、水戸芸術館館長（現在まで）

【賞歴】

昭和47年 第28回日本芸術院賞（「交響楽団指揮者としての業績」に対して）
昭和61年 朝日賞（「世界の音楽界における活躍と業績」に対して）
昭和63年 国際交流基金賞
平成13年 文化功労者
平成15年 サントリー音楽賞（「指揮者としての長年にわたる功績」に対して）
平成20年 文化勲章
平成23年 高松宮殿下記念世界文化賞

(1) 概要

日本芸術院は、日本芸術院令第3条に基づき、芸術上の功績顕著な芸術家の中から補充すべき会員を毎年決定しています。

日本芸術院は、その前身である帝国美術院が森鷗外を院長として大正8年に創設されて以来、現在まで約100年の歴史を持ち、日本芸術院会員への選考は、美術、文芸、音楽、演劇、舞踊等の芸術各分野の芸術家から栄誉あることとして広く認識されています。

令和3年度においては、対象分野に新たに「写真・映像」「デザイン」「マンガ」「映画」が追加されました。

日本芸術院会員は、一般職の国家公務員（非常勤）で、年金額は250万円、任期は終身です。

(2) 選考方法

会員候補者は、令和3年度より、外部有識者で組織する推薦委員会及び会員による推薦、会員と外部有識者で組織する選考委員会による絞り込み、会員による選挙を経て、総会の承認を得ることにより決定します。

(3) 選考経過

1. 推薦委員会及び会員より、第一部（美術）27名、第二部（文芸）26名、第三部（音楽・演劇・舞踊）30名、合計83名の推薦がありました。
2. 選考委員会を開催し、第一部16名、第二部14名、第三部14名、合計44名にまで絞り込みが行われました。
3. 絞り込まれた44名について、会員による選挙を行い、開票した結果、第一部5名、第二部3名、第三部3名が、部会員の過半数票を得て、合計11名が会員候補者に内定しました。
4. 内定者（辞退者を除く）について、書面による会員総会の承認を経て、会員候補者として9名が決定しました。

(4) 会員数（現員は令和4年2月8日現在）

日本芸術院会員（定員120名）は、第一部（美術：定員54名）は現員44名に4名加わり48名、第二部（文芸：定員34名）は現員27名に3名加わり30名、第三部（音楽・演劇・舞踊：定員32名）は現員23名に2名加わり25名、合計で現員94名に9名加わり103名となります。

日本芸術院会員数一覧

令和4年2月8日現在

部別	分科	種 別	現 員	令和3年度 補充予定数	令和3年度 補充数	補充後の 会員数
第一部 （美術）	1	絵 画	21	6	1	22
	2	彫 刻	9		1	10
	3	工 芸	7		0	7
	4	書	4		1	5
	5	建築・デザイン	3		1	4
	6	写 真・映 像		2	0	0
	小 計		44	9	4	48
第二部 （文芸）	7	小説・戯曲	12	5	1	13
	8	詩 歌	9		0	9
	9	評論・翻訳	6		0	6
	10	マ ン ガ	0	2	2	2
	小 計		27	7	3	30
第三部 （音楽・演劇・舞踊）	11	能 楽	5	5	1	6
	12	歌 舞 伎	5		0	5
	13	文 楽	2		0	2
	14	邦 楽	4		0	4
	15	洋 楽	3		1	4
	16	舞 踊	3		0	3
	17	演 劇	0	2	0	0
	18	映 画	1	1	0	1
	小 計		23	8	2	25
総 計			94	24	9	103

※水色部は、新分科である。

※令和3年度補充数のうち「建築・デザイン」分科の1名は、建築分野の会員である。